



既成事業に市民の協働参画をどのように組み入れるかについては、まず何があるかを知ること。現在の状況なり内容を検証することが必要。

芦屋を文化性の高い都市にすることによって得られる物心両面の価値を目標とするならば、まず行政が目標実現に向けて不動の姿勢を持ち、しっかり腰を落ち着けてやるのが肝要で、明確な市としてのビジョンを市民に伝えなければならない。

芦屋のようなコンパクトな街だからできる手のつなぎあいというか、出来る限り分野横断的に考えることによって、新たな展開が大いに期待できる。

かつての良き芦屋の文化、それまで蓄積されたものがうまく次の世代にも継承され誇りとなっていくような、世代を越えて価値を引き継いでいくための学校教育や幼児教育など継承の為の活動も非常に大事である

芦屋の市民性として、ある意味、集団行動よりも単独行動が先行するようなところがあるようなので、放っておくといつまでも同じ状態が続くような感じである為、市民力・文化力など、市民自ら横のつながりを広げ、協力し合うという活動を市が暖かくサポートしていくような仕掛けが必要。

行政側がもっと積極的に現状の説明や課題について市民に説明あるいは相談や協力をもとめるような姿勢が必要。それにより、一方通行ではない双方向の意見交換ができ、良い結果につながっていくのではないかと。

キョウドウは共同ではなく協働と表記する。この二つは意味が全く違う。英語ではコプロダクションであり、行政と市民が対等の立場で、意思形成過程から決定・実行・評価・修正・再決定の一連のプロセス全てのどこかに回路が開かれていて、お互いに責任を持って一緒にやりましょうということです。

既成事業に関しては、担当部局のバラツキがあり、それぞれの事業は意味があることであっても、うまく良い結果に結びつかない。統括的統一的に各事業を進行管理、あるいはバックアップする仕組みが必要。

行政に提案できる協働参画の事業については、それぞれの事業をやっている部局において、事業の洗い出しをして、市民提案で実験的に出来る事業なのかということの評価するのがいいのではないかと。

事業の評価については、コスト評価：安くできたか、無駄が無かったか。パフォーマンス評価：アウトプット評価とも言えるが、一定のコストでどちらが生産性が高かったか、サービス量が多かったか、質をあげられたか。そして一番問題なのがアウトカム評価：成果評価でその結果どうなったのかという評価。これをしようとする、その事業が持っている使命とかミッションが明確化されていないと評価のしようが無い。そういう意味で評価軸を定めるのは事業を担当する人達と市民であるということで、これを市民参画で決めていけば良いと考える。

ハード・ソフト・ヒューマンの3つの面で高めることが必要。

〔結論〕以上のような意見が出され、全員で意見を確認。次回の会議までに、市内文化施設等の見学を実施することとし、問題点等の検証を行うこと。次回会議では中間報告をまとめることも視野に入れて議論することを確認。

以上